都市とはどのような存在か

阪谷芳郎（1863－1941）の「帝都物語」

中島直人　東京大学

「むかし、ある日、平将門が友人の藤原純友とハイクして叡山にのぼり、いま「将門岩」と呼ばれているあの大岩の上から、当時の皇居を中心とする「平安の都」を俯瞰しその壮麗雄大に打たれ、むらむらと謀叛心を起し、それが将門の乱となったということが伝えられている」[※1]

物質的な革新と精神的な革新

大蔵官僚・辰宮洋一郎は、渋沢栄一の令を受け、東京帝国大学実験物理学教室を訪ね、長岡半太郎に東京市区改正の協力を依頼した。その際、辰宮は「今回の帝都建設は、単に建築学的見地から完璧を期すだけのものではありません」[※2]と前置きし、世界地理的、地相術的、物理学的、そして神霊的にも完璧に防備された都市を目的とするのだと説明した。続けて、「国家とは、物質的完璧さのほかに、精神上の―いえ、あえて神霊上の、と申し上げますが―完璧さをも要する有機体だと心得ます」[※3]と、帝都のありようを国家のありように重ねた。『帝都物語』では、市区改正の秘密会議にて、渋沢自身にも「人間と同じく都市にも徳がなければいかんのだ」[※4]と語らせている。『帝都物語』は、端的に言って、帝都・東京を舞台とした、「都市とはどのような存在か」という問いをめぐる物語である。都市は単に機能的で合理的で物的な存在なのではない。そして、都市計画とは単に都市空間の近代化を目指すものではない。

明治2（1869）年に酒井雅楽頭の屋敷跡に大蔵省が設置された。その敷地内には平将門の首塚が存置されていた。明治39（1906）年、大蔵省開設以来、明治財政史の編纂を担当していた明治財政史編纂会は故蹟としての首塚の将来的な滅失を危惧し、元大蔵次官であり将門雪冤運動を率先していた渋沢栄一と「将門故蹟考」の著者である織田完之の力添えを得て、将門塚の保存碑を建立することになった。その際、祭祀委員長として保存碑建立を指揮し、陰文を著わしたのは、渋沢の娘婿であり、時の大蔵大臣であった阪谷芳郎である。『帝都物語』の冒頭の章で、そのあたりの経緯は言及されている。ただ、『帝都物語』では、阪谷という人物については、あくまで岳父・渋沢の意向を受けて鎮魂祭を執り行った者であって、とりたててその思想や業績を掘り下げて理解すべき対象とはみなされていない。しかし、近代東京を通して都市や都市計画のありようを物語ろうとする際に、阪谷は決して無視できない人物である。

阪谷は大蔵大臣を辞した後、明治45（1912）年に四代目の東京市長に就任する。その翌年、東京経済協会例会にて「東京市の経営に就いて」という題目で、帝都建設の方針を講じた。そこで阪谷は「東京市は精神的にも物質的にも革新したい」[※5]と語っている。すでに初代東京市長の松田秀雄、二・三代目市長の尾崎行雄のもとで東京の市区改正は着々と進められ、物質的には革新が進んでいた。阪谷は、そのような都市空間の近代化に加えて、「精神」面での革新を行いたいと明確に述べたのである。阪谷は、都市は物質的なものであると同時に、精神的なものであると考えていた。辰宮洋一郎の言葉との重なりが見られる。

阪谷芳郎は文久3年（1863）に備中国に生まれた。父・阪谷素（朗廬）は著名な儒学者であった。芳郎は朗廬の学問的才能を受け継いだのか、学業は優秀で、東京英語学校、東京大学予備門を経て、東京大学文学部に入学し、その政治学・理財学科を卒業した後、大蔵省に入省した。いわゆる「学士官僚」の嚆矢として、大蔵次官、そして大蔵大臣にまで登り詰めた。その間、日清戦争、日露戦争時の戦時経済や戦後経営を担当し、その功績により男爵に叙せられたのである。退官後は、その経験を生かして、特に東京市政の財政的再建を期待されて東京市長に就任し、大正4（1915）年までその職を務め、市長辞任後は貴族院議員として政界で活躍した。こうした官界のエリートであった阪谷が、都市の精神的なものに触れた最初は、もしかしたら先に言及した大蔵大臣時代の将門の首塚の保存碑建立だったのかも知れないし、あるいはもともとそうした都市の精神的なものに関心を持っていた阪谷だからこその将門の首塚だったのかも知れない。

阪谷は将門塚の保存碑建立の前年明治38（1905）年には、自ら経済学協会の場にて将門塚についての紹介報告を行っている。同時に歴史学者の三上参次（東京帝国大学教授）に将門塚についての歴史的考証を依頼したのも阪谷である。そして、保存碑建立にあたっては、工事の必要上、同地の簡単な掘削作業を行ったことが「阪谷蔵相が熱心なる将門宗であったにしろ、由緒ある古蹟を専門家の立会をも経ずして、素人了簡に攪乱するは甚だ以て宜敷ない、のみならず後世に誤りを伝ふる虞もある」[※6]との批判を受けた一方で、考古学界からは、もし阪谷蔵相が将門塚の調査を進めるのであれば、歴史学者ではなく考古学者に調査を依頼されたいという意図を含みつつ、「今回同省にて取拡工事を起すにつき、池を埋め塚を均らす必要起りしを、阪谷次官は嘗て

松方伯より保存上の注意もありしやにて、之が大体の調査を為して紹介せられたれば、新に世人の注意を引くことに至りしこと学術上の点より氏に向かって謝する処なりとす」[※7]と評価された。ここでは、保存碑建立に至る前に、その滅失可能性が確かにあったことも言及されている。単に裏で渋沢が娘婿の阪谷をけしかけ、保存碑を建立させたということではなく、阪谷自身の将門塚への拘りや関心があったと考えたい。

市区改正と史蹟名勝天然紀念物保存

さて、では、東京市長としての阪谷の講演「東京市の経営に就いて」で阪谷が語った精神的な面と物質的な面の両面での革新の具体的な内容はどのようなものであったのだろうか。実は精神的な面に関しては、学者や実業家を呼んで講演会を開催するといった程度のことしか語っていない。講演の大部分は、港湾整備、低廉な価格での住宅供給、交通機関の完備、防火設備、道路など、物質的な近代化についてであった。しかし、東京市長・阪谷が東京市長に就任する直前に力を入れていたのは、ここで語られたような東京の都市空間の近代化路線ではない。むしろ、一見するとそれとは真逆のことがらについて関心を持っていた。阪谷は、将門の首塚の件以降、市長就任までの間、日本の文化財保護運動の端緒を切りひらくことになる史蹟名勝天然紀念物保存協会の設立に深く関わっていたのである。

史蹟名勝天然紀念物保存協会の源流の一つは、紀州徳川家に伝えられてきた文書等の保存を担った南葵文庫において、徳川頼倫、徳川達孝の発起で1910年11月に開催された史蹟史樹保存茶話会である。ここに市長就任前の阪谷が参加し、積極的に発言している。阪谷は江戸城の日比谷門が失われたことに対して憂いを表し、官僚・大臣時代に国際的に活躍した経験に基づくものなのか、アメリカ合衆国における史蹟名勝天然紀念物の保存の取り組みについて紹介し、「二千五百年の大切な歴史を持って居る我国に於ても保存すべき物を残酷に毀すという事は遺憾又恥ずべき事と考えます」[※8]と講じた。阪谷は、翌1911年4月に開催された第二回茶和会でも、再度、保存の取り組みについて講演し、「文明の進歩というものは動もすると歴史並に天然物を毀わすものである、鉄道の建設とか或は道路の改築、市区の改正というものは歴史の事物又天然物の保存には反対の結果を往々にして持つものでありますが、それは注意の如何に依っては如何様にも調和が出来る」[※9]と指摘した。阪谷は当時の都市計画＝市区改正が目指した近代化を根拠づけている開発主義というべき思想に疑問を呈し、開発に対して保存を対置し、その両者を調和させることが可能ではないかと提案したのである。

二回にわたる茶話会をきかっけとして、史蹟名勝天然紀念物保存協会の設立準備が進められ、同年12月10日に発会式が執り行われた。会長に徳川頼倫、副会長に徳川達孝が就任したが、もう一名、副会長に指名されたのが、阪谷芳郎であった。そして、その翌年7月、ほぼ9年間にわたる東京市長在任期間中に市区改正新設計に基づく事業を推し進めた尾崎行雄の辞任を受けて、阪谷が次期市長に任命されたのである。東京市長としての阪谷の最初の仕事は、明治天皇崩御への対応であった。阪谷は葬儀の陣頭指揮に加えて、岳父の渋沢栄一とともに、明治神宮建設運動を中心的に進めていった。阪谷の市長としての功績は、東京の近代都市計画史上、最大にして唯一の神社造営事業であった。しかし、それに留まるものではなかった。

阪谷市長時代に重用され、大正から昭和戦前期に長らく東京市公園課長として東京の公園行政をリードした造園家の井下清の回想によれば、阪谷は市長就任直後に、井下らに「政治行政から各種施設に至るまで宏大にして完備することも必要であるが、帝都たる以上は神聖な都でありたい」[※10]と語ったという。そして、根本的な計画の審議だけでなく、すぐにでも実行可能な施策の展開に力を注いだのだと伝えている。阪谷の市長在任中、都市街路風景向上のための御茶ノ水、数寄屋橋、虎ノ門、今戸の四公園の開設、郊外自然公園の嚆矢である井之頭恩賜公園の開設、街路樹の復旧整備などに取り組んだ。特に史蹟名勝天然紀念物保存運動でも重視していた老木や樹林の保存には注意を払った。豊かな屋敷林を有する乃木大将邸の保存（乃木神社設立）、角筈の梅の名所銀世界の芝公園への移植保存、小金井桜の保護などに相当な市費を投じた。井下は、阪谷が「都市美に関する管理指導」[※11]を重視し、これらに関する施策は直接、市長からの口達で進められたと証言している。東京市長としての阪谷は「都市とはどのような存在か」、「都市計画はどうあるべきか」、その思想を持ち、実践に移したのである。

タウンプランニングとシヴィックアート

1923年の関東大震災が帝都東京に与えた被害は甚大であった。よく知られているように、震災直後に内務大臣に就任した後藤新平は、この機会に「復旧」ではなく「復興」を目指し、帝都復興院を設立し、壮大な帝都復興計画を立案した。当時、帝都復興をめぐっては、そうした官側の動きだけでなく、民間の側からも様々な提案活動が展開された。とりわけ「変わった顔触で帝都美化の運動　やぼな都を作るなと文学者や美術家も加って」（東京朝日新聞、1925年10月23日）との見出しでその設立が報道された都市美研究会は、井下清とともに帝都緑化協会を立ち上げ、植樹祭を開始していた都市研究家の栃内吉胤、東京市吏員として復興に取り組んでいた建築家の石原憲治らが中心となり多彩な人材を組織化し、「シヴィックアートの立場から内的に外的に整斉したものにしようという切実な要求」[※12]のもと、東京市を鞭撻するとともに、市民に対して、「己が住家としての都会」[※13]に

目覚めさせようという運動＝都市美運動を推進した。1926年10月には、設立一周年を機に、研究機関から実践機関への展開を目指して、都市美研究会から都市美協会に改称、改組された。ここで新たに設けられた会長職を引き受けたのが、阪谷であった。

都市美協会は、1）眼前の様々な都市美上の課題に関する関係当局への建議・意見、2）例会や協議会の開催による都市美に関する研究・議論、3）植樹祭や道路祭、建築祭、あるいは機関誌発行を通じた都市美思想の啓蒙・普及に取り組んだ。とりわけ、都市美協会の存在が社会的に広く認知されるようになった契機は、関東大震災で焼失した後、中央官衙計画に基づく第一号庁舎として桜田門近くに建設中であった警視庁新庁舎に関して、昭和4（1929）年、「新警視庁庁舎望楼撤廃に関する請願書」を警視総監、大蔵省営繕管財局長官に提出した件が大きく報道されたことである。国会議事堂を中心とする遠望景観の保全、桜田門付近の濠端に調和した建築群風景の保全、そして宮城に対する畏怖の三点から、新庁舎に付属する予定の望楼の撤廃を要求し、そして、実際にその要求を受け入れさせたのである。会長である阪谷の表の役割は、建議への署名や雑誌の巻頭言、協議会での挨拶などであったが、井下によれば「市長当時の閣下と同じく、事の大小軽重よりは直に実行に移す都市美の実践的指導に熱誠を披瀝され、我々会員の感激したことであって、僅かなことであっても都市美に関しては自筆の指令を頂き海外よりの資料などは必ず廻送された」[※14]のであった。実際、望楼撤廃運動の際には、阪谷自らが大蔵省営繕局や警視総監のもとを訪問し、議論を行うなど、主体的に動いた。「百会長」と呼ばれるほど、様々な組織活動に指導的立場で関わった阪谷であるが、こと都市美協会については、昭和16（1941）年の逝去に至るまで会長としての職にあり、その活動を牽引したのである。都市美協会の建議の内容は、外濠風致保存に関する建議書（1928）、蓬莱園保存に関する建議書（1934）、四谷見附並外濠風致保存に関する建議書（1936）、社寺境内附近地の美観的取締に関する建議書（1940）などに見られるように、近代主義的都市計画の行き過ぎに警鐘を鳴らす、既存の風致美観の維持、保存を基調とするものが多かった。

都市美協会の機関誌『都市美』創刊号（昭和6（1931）年）に阪谷の名前で掲示された短文「都市美創刊に際して」は、都市美協会が展開した都市美運動の最も明確な運動宣言であった。ここで阪谷は「都市美運動の真の使命は、単に都市の細部の美醜を云為するに止まらず実にその都市の進路を効率的な活動場となすと同時に美しく愉快な健康地となすように仕向けてゆくところにある」[※15]と述べている。さらに、「斯る都市に於てこそ始めてその市民はシヴィックスピリットを持ちうるようになりパトリヲチズムが助長される、近代の都市美運動は実にかのタウンプランニングと相俟って市民に対しその揺籃地を約束する切実重要なシヴィックアートでなければならぬ」[※16]とし、「用」の都市計画＝タウンプランニングに対して、「美」のシヴィックアートを対置し、その関係づけを試みた。阪谷をはじめ、都市美協会関係者は、アメリカ、そして欧州で普及し始めていた「シヴィックアート」を都市計画における審美的観念と市民の公共的観念という二つの側面を補うものとして捉えたのである。その背景には、もちろん、「都市とはどのような存在か」という問いがあり、そして、都市計画は単に都市の近代合理主義的な改造を目指すのではなくて、「都市生活者の精神や道徳の上に良い影響を及ぼすように仕向けていき、人生というものには金儲け以上の何物かがあるという事実を知らしめる」[※17]ものでなければならないという思想があった。

いくつもの「帝都物語」を探して

『帝都物語』の著者の荒俣宏は、「新しい文明開化をはたすために無計画に大地を傷つけ、踏みにじった近代の都市政策」[※18]に対する批判と、風水に基づく「大地の生命力を大切にし、環境と美観をも考えにいれた古い都市計画」[※19]の再興という構図を設定し、後者をこれからの都市再開発の戦略として提案する、『帝都物語』はそのような目的を持った伝奇小説であったという。しかし、大事な点は、前者の近代主義的都市計画への批判やオルタナティブの構築は、決して架空の物語としてのみ語られてきたというわけではないということである。阪谷芳郎という人物の思想や活動を通じて示してみたのは、現実の物語としての帝都の都市計画のオルタナティブ探究の存在であった。では、架空か、現実か、その区別が大事なのだろうか。そうではない。『帝都物語』自体は、現実と創作の狭間で揺れ動く、両者の境界を巧みにぼやかした物語であった。その顰に倣えば、つまりもう少し言い換えるとすると、形式は現実だろうが、創作だろうが関係ない。この東京という都市やその都市計画のありように対して、人々がオルタナティブを常に探究してきたということ自体が大切な事実なのである。その一つ一つの探究のことを「帝都物語」と呼ぶことができる。歴史を通じて見出されてきたいくつもの「帝都物語」の存在が、東京という都市の文化資源の源であり、その豊かさの基盤、そして象徴だと言えるだろう。

ところで、本稿のエピグラフでの「将門岩」への言及は、かつて阪谷が率いていた都市美協会が昭和25（1950）年に日本都市美協会という新たなかたちで再組織化された際の機関誌復刊第1号に掲載された鮎沢巌の論考からである。都市美協会は阪谷の逝去後、戦時中に活動を停止していたが、終戦後、渋沢栄一の四男で初期田園都市開発に関わった渋沢秀雄を一時、会長に迎えて活動を少しずつ再開し、そして終戦後5年で日本都市美協会として復活を果たすのである。戦前から国際労働機構（ILO）の

職員として国際的に活躍した著者の鮎沢は、かつての日本の都市にあった「ディクニティー」や「キャラクター」が失われた様子を憂い、都市美の構想を綴った。しかし、一方で、鮎沢が紹介した「将門岩」の話は、都市美は嫉妬や憎悪の対象にもなりうるということを示唆しているようにも思える。荒俣は『帝都物語』を「東京を愛し、東京を憎む、すべての人々に―」[※20]という献辞を付けて世に送り出している。「都市とはどのような存在か」という問いに対して、本項で阪谷を通じて、物質と精神、開発と保存、用と美といった二項対立的な枠組みとそれらの止揚への意思を見てきたが、東京、そして都市が持つ根本的な両義的性格をさらに掘り下げていくと、実は愛情と憎悪にたどり着くのではないかということが、平将門、そして加藤保憲の時代を超えた真摯な奇行に付き合ってみた結果として、確かに感じられることである。『帝都物語』後の私たちが、私たちなりの「帝都物語」を綴るとすれば、やはりこの感じをどう消化するかから出発せざるを得ない。近いうちに、その一歩を踏み出そうと思う。

註

※1 鮎沢巌「焦土に現代都市を」『都市美』、1号、1－2頁、1950年6月の2頁。
※2 荒俣宏『帝都物語　第壱番』、角川書店、1995年の82頁。
※3 同上の83頁。
※4 同上の132頁。
※5 阪谷芳郎「東京市の経営に就いて」『東京経済雑誌』、1697号、13-14頁、1913年の13頁。
※6 東京朝日新聞、1907年5月31日付朝刊、5面。
※7 和田生「大蔵省内の将門塚につきて」『考古界』、5巻3号、62－66頁、1905年11月の62頁。
※8「演説談話」、『史蹟名勝天然紀念物保存協会報告』、第1回、1－67頁、1911年11月の27頁。
※9 同上の43頁。
※10 井下清「阪谷子爵と東京の都市美」『都市美』、38号、25－27頁、1942年1月の25頁。
※11 同上。
※12「都市美研究会の設立」『建築雑誌』、477号、105－106頁、1925年12月の105頁。
※13 同上。
※14 前掲※10の27頁。
※15 阪谷芳郎「都市美創刊に際して」『都市美』、1号、1頁、1931年4月。
※16 同上。
※17 橡内吉胤「東京といふところ」『日本評論』、12巻6号、332－339頁、1937年6月の339頁。
※18 前掲※2の4頁。
※19 同上。
※20 前掲※2の8頁。

参考文献

1) 故阪谷子爵記念事業会『阪谷芳郎傳』、1951年
2) 丸山宏「『史蹟名勝天然紀念物』の潮流―保存運動への道程」、『『史蹟名勝天然紀念物』解説・総目次・索引』、5－37頁、不二出版、2003年
3) 中島直人『都市美運動　シヴィックアートの都市計画史』、東京大学出版会、2009年
4) 西尾林太郎『阪谷芳郎』、吉川弘文館、2019年